

ヨーロッパアルプス紀行

2004, 8/14 ~ 8/21

今市病院 熊谷真知夫



シュレックホルンとバツハアルプ湖



シュネマットのホテルから、マッターホルンを見る

ヨーロッパアルプス紀行

今市から成田へ(紀行、第一日目)

今日は、2004年、8月14日です、良子共々、いよいよスイスアルプス、トレッキングの旅へと出発する日がやってきました。前日、ホテルオークラに一泊して、朝、5:00に起床、6:00にオークラ別館の玄関前から、成田空港行きバスに乗り込みました。

バスが空港のゲートを通過する際に、制服の係官がものしく車内に乗り込んできて、乗客ひとりひとりのパスポートをチェックしました。その後、バスは空港内への通行を許可され、〇時〇分に、第二旅客ターミナルの〇番ゲートへ到着しました。あらかじめ、降車の際には、必ずターミナルを確認し、くれぐれも、間違えのないようにと念を押されていましたので、少し緊張しました。

枠が銀色に輝いている、ステンレス製のドアを押して中に入ると、そこは日常の生活とは隔絶した別世界でした。高い天井に、エコーの効いたアナウンスが響きわたり、至る所で、オレンジ色の電光掲示板の数字や文字が、めまぐるしく点滅していました。

いろいろな人種の人達が、大きな荷物をカートに載せて、慌ただしく往来し、その間を様々なユニフォームの作業員が、動き回っています。国際空港の持つ、独特の華やかさが、よそ行きの気分をいやが上にも高揚させます。



搭乗手続きのために、〇〇番のスイス航空のカウンターに向かいました。係のスタッフにチュウワースにチュウリツヒ行き、〇〇〇便のボーディングパスとパスポートを提示して、トランクをベルトコンベアーに載せました。チケットとタックを受け取り、これで起床時からずっと、せかさされていた気持ちに一区切りです。

旅行会社の成田空港での担当者から、旅行の概略の説明がありました。スイスアルプス

だけのコースと、その後、モンブランに数日間、滞在するコースの二種類がありました。我々はスイスアルプスのみで、シャモニーは最終日に一泊するだけです。強風でモンブランの何処かのロープウェイが壊れて、モンブラン班の予定が、変更になるかもしれない旨の、説明とお詫びがありました。

手荷物検査開始までには、少し間がありましたから、エスカレーターで二階へと向かいました。昇る途中で上から見下ろすと、人々が不規則な軌跡を描いて、活発に動き回っているのがよく見えました。その、蜂の巣をつついたような混雑を眺めながら、いよいよフライトだ、との実感が沸いてきました。

スイスとの時差は七時間で、飛行時間は十数時間です。

機内では、インターフォンで暇をつぶしました。チャンネルを変えては、コントローラーでメニューを呼び出し、映画や音楽、ドキュメンタリーを楽しみました。特に、興味をそそられたのは、飛行航路がリアルタイムで示される、地図でした。現在位置が地図上に、小さな飛行機の絵で示され、尾翼部から赤線で、それまでの航路がトレースされるのです。勿論、何処を飛行しているのかを知らせることが目的ですが、機内生活に飽きてくると、この画面を呼び出しては、数分間毎に、徐々に赤線が伸びるのを見ることが、楽しみでした。

3Dアニメの「シュレック2」も愉快でした。3Dの画像が新鮮というだけでなく、

荒唐無稽の筋立てには、思わず吹き出してしまいました。「眠れる森の美女」をもじっているのでしょう、容貌の醜い怪物とお姫様が恋をして、白馬の王子様と妖精が、恋路の邪魔をする、陰險な悪役に仕立てられていました。

今は何時頃でしょうか。早朝からの疲れがいちどきに出て、目を閉じました。すると、ジェットエンジンのゴーツという噴射音が、微かに、地鳴りのように響いてきました。

自分ではウトウトとしかしくなかった積もりなのですが、実際にはどの位、眠ったのでしょうか、食事を準備する、陶器のこすれ合う音で目が覚めました。食事を済ませると、ウル山脈を越えてバイカル湖方面に向かっているという、機長のアナウンスがありました。間もなく、東欧からドイツ上空です。

いよいよ航路地図にはチューリッヒが現れました。

フィルストからファールホルンへ（紀行、第二日目）

紀行、第二日目、最初のハイキングの日です。今日は午前〇時間、午後〤時間の合計〇時間の行程です。普段、全く身体を動かしていませんから、山道をどの程度歩けるのか皆目、見当が付きません。少々不安ですが、とにかく、時にホテルの食堂で朝食を済ませた後、部屋に戻って準備をしました。旅行前に慌てて買い揃えた、登山ウェアを着て、トレッキングシューズを履いて、リュックザックを背負って、その後ろのポケットにはアルプ

スでの必需品、サングラスも入っています。ただ、リュックは背中からずり落ちないようにと、余計なお世話が施されている代物で、随所に樹脂製のバックルがついていて、組み合わせるのに少々手間取りました。

しかし、これでどうにか格好だけはつきました。すると先刻の不安も何処へやら、もう、矢でも鉄砲でも持ってこいと、自然に気持ちだけは大きくなります。

フロントに下りて行くと、メンバーの皆さん方は既に集合していました。ガイドのZさんが、カウンターに座っている、金髪の若い女性にお弁当を催促しました。それで各人にお弁当が配られました。私は先程、せっかく苦勞して背負った、例のリュックザックを下ろして、その中に受け取ったお弁当を詰め込みました。今度は、バックルはいい加減に掛けました。

ホテルの玄関を出て、左手方向に歩きました。町はこちら側が上がりになっており、10分ほどでロープウェイの駅に着きました。Zさんは切符を買い求めながら、メンバーの不安を少しでも和らげるためなのでしょう、さかんにただの丘歩きであることを強調していました。

6人乗りのゴンドラで一気に標高、2168mのフィリストに登りました。

そこからファールホルンに向けて、いよいよトレッキングが始まりました。天候は快晴でとても爽やかでした。10数分程歩いたでしょうか、突如として視界が開けたその瞬間で

した。氷河を抱いて白く光輝いている、アルプスの峰々の壮大なる美しさに、その稜線の峻厳さに、思わず息を呑みました。



フィリスト



アイガー、メンヒ、ムンタラツラの三秀峰

2,100mという高い標高だからこそ感じられたのでしょうか、透き通るような空の青さや、まぶしいほどの雲の白さも、それまでには経験したことのない新鮮な驚きであり感動でした。そして、雲海が西から東へ向かってゆったりと流れており、各々の雲の先端は、東か

らの直線的で透明度の高い光を浴びて、金剛色に輝いているのです。底面には淡く灰色の影を宿し、凹凸の濃淡がついています。そして、その濃淡が、上層部の純白さや、先端の金剛色をひとときわ際立たせているのです。真っ青に澄み切った空を背景とした、この情景のあまりの美しさ、荘厳さには、ただ言葉を失いました。

遙か下方を見晴らせば、なだらかな緑の丘陵が不規則な波長でうねって行き、最後には遠近法の収束点となって谷の奥底へと吸い込まれるようにして消えて行きます。時折、広がる森の濃い緑が、風景のトーンに巧みな変化を与えながら散在しており、さながらマツチ箱のように遠望される小さな家々は、すべて中間色の茶系統で統一されています。人工的な原色はといえば、窓枠や飾り窓に赤や青、緑が僅かに使用されているだけです。もっとも、これらの鮮やかな色彩は遠望からではとても識別できませんが。

人々の調和を保とうとする自制心や知性が、美しい自然と融和するとこれほど上品な風情となるのか、人工的構造物が自然を乱しさえしなければ、風景とはかくも美しいものなのか、ということに改めて痛感させられました。それは幼き日に語り聞かされた、「アルプスの少女ハイジ」の風景そのものでした。そして、故郷の日光に想いを重ねれば、自然の中に無遠慮に立てられた、広告塔やら幟（のぼり）などの無神経さが少し、恥ずかしくなりました。

上から見下ろせば、比較的ならかに見える丘陵も、実際に歩いてみると、けっこうな起伏です。私は早々と、右膝外側の靭帯が痛くなってしまいました。上がりはよいのですが、下りがだめなのです。

昨日、地図で確認したように、手前からアイガー、メンヒ、ユングフラウの順序で連なっているれば、そちらが西のはずです。

すると、この緑豊かな牧草地帯は南東に面した斜面なのでしょう。そこかしこに、首から大きなカウベルをぶら下げた牛が放牧されており、のどかに草を噛んでいます。時折、我々の行く手を塞ぐように立っているのは、メンバー達の人気者になっていました。牛の一群は急斜面をかなりの高さまで登って行くようでした。

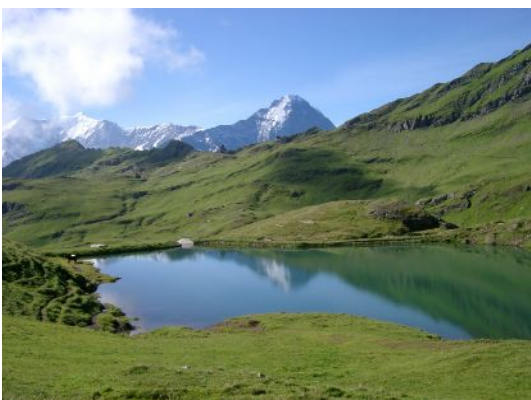
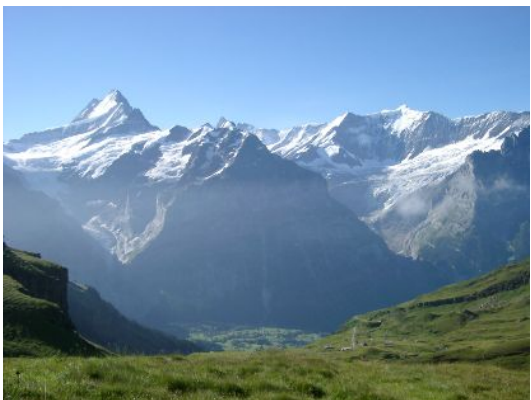
起伏に富んだ緑の丘陵の、この牧歌的な風景を横目に眺めながら、私達はトレッキングのために良く整備された細い山道を、縦列で進んで行きました。ガイドのZさんを先頭に、北に向かって進んでいるのでしょうか。いつしか三つの秀峰は斜め後になっていきます。角度がわずかでも変わると、その度に風景の雄大さが微妙に変化する感じがして、衝動的にシャッターを切りたくなります。そもそもデジカメではこのパノラマの壮大さや、奥行きの高さ、角度によって千変万化する、光の美しさを捉えることは到底不可能なのですが、思わずシャッターを切ってしまうのです。これでは、メモリーがいくらあっても足りません。

牧草の中に所々に咲いている花々は、既に秋の気配とのことでした。種類毎に説明の白塗りの木札が刺してありました。色彩は赤、白、黄色、ゲンチアナブルー等でした。日本では悪名の高いトリカブトの花も咲いていました。



バツハアルプ湖

そして、「時間位歩いたのでしょうか。道筋は定かに覚えていませんが、最後の方は、少し登りながら、左になだらかなカーブであったような記憶があります。忽然として、透き通るような青い水をたたえた、幻想的で美しい湖が目の前に姿を現しました。当トレッキングの目的のひとつである、バツハアルプ湖でした。その時、湖面は鏡のように凷いでいて、氷河を抱いた山々を逆さまに写し出していました。



道は湖畔を半周廻るようにして続いていました。ふと観察すると、水際から少し離れた、水草の繁茂している場所には、黒いメダカのような魚が群れをなしていました。湖の周囲には牛もたくさん草を噛んでいましたので、水飲み場も兼ねているようでした。



この辺りから勾配が徐々に急になり始めました。湖を絶景に見下ろす場所でコースを外れて、昼食となりました。食事中は、それまでのあまりの風景の壮大さや、美しさに興奮していて、疲れはあまり感じませんでした。

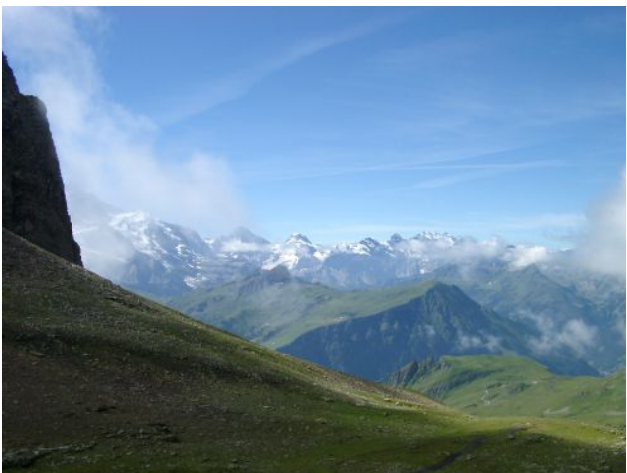
昼食を済ませて、湖畔の道は後半からはかなりの上がり勾配となっていました。徐々に遠ざかって行く、湖を見下ろす風景が心残りで、少し進んでは何度も後ろを振り返りました。



進行方向を遠く見上げると、丘陵の緑はやがて空の抜けるような青へと連続して行きます。そこに浮かんでいる雲は、純白です。素朴な石の建物でも目に入れば、それこそまさに一幅の点描画です。いやが上にも今後の期待に胸が膨らみました。



そして、あの美しい丘の向こうには一体何が見えるのだろうか、という想いはやがて抑制の効かない衝動となり、疲れた足を励ますのでした。もう一步、さらにもう一步、と気力を振り絞り、息せき切って、ついに丘の上に立ちました。すると、そこには、期待に違わぬ、大パノラマが広がっていました。



ファールホルン

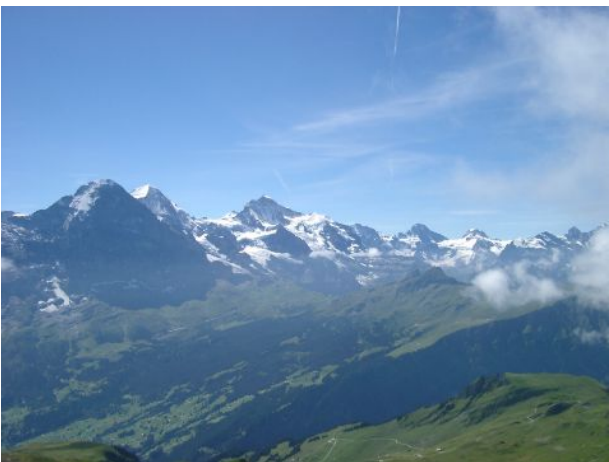
しかし、感動の余韻をかみしめるのも束の間でした。目的地のファールホルンは更に上、しかも見上げると、一瞬、気持ちがあたじろぐような急峻となっていました。しかし、あの大パノラマを見せられた直後では、たとえ山登りの素人といえども、ここで断念する訳にはゆきません。尤も、アルプスの山岳プロであるZさんに云わせれば、ただのハイキングである、とのことでした。

山頂のロッジは遥か霧にかすんでいました。しかし、地元のハイカー達には老人、女性、子供も混じっていましたので、とても弱音など吐ける状況ではありませんでした。

さいわいな事に、上がり坂では膝の痛みはそれ程でもありませんでした。問題は普段、鍛えていない心肺機能でしたが、ハイキングと挑発されては既に、闘志に火が付いていました。ただ、がむしゃらに急坂に向かって猛進しました。ずっと以前に、故郷の山歩きに長けた知人から、山歩きのこつは絶対に一定のペースを乱さないことだ、と教わったことがあります。しかし、この時には、全く冷静さを欠いており、そんなことはすっかり忘れていました。案の定、心臓が張り裂けるように感じた瞬間もありましたが、なんとか口ツジへと到達できました。



悪戦苦闘の果ての達成感は何とも爽快でした。
暫し、ロッジの展望台で休憩しました。昼食の際、残しておいたりんごを頬張りま
すが、実に満ち足りた甘い味でした。



ファールホルン展望台から、ユングフラウ山系を眺む

ただ、残念だったことは、ユングフラウ山系のあまりの雄大さに見とれてしまい、反対
側の奇景を写し損なったことです。もっとも、とてもこれは写し切れるものではないと、
はなから諦めてしまったこともあります。

それは、あたかも、天地の底が抜けたかと思われるほどの驚愕でした。約2,600mの高さの足元から、垂直に真下を見下ろしたかのような景観で、しかも眼下を流れて行く雲の間からは、下の地形が、延々と、遙か見渡せる限りの彼方まで続いて行くのです。

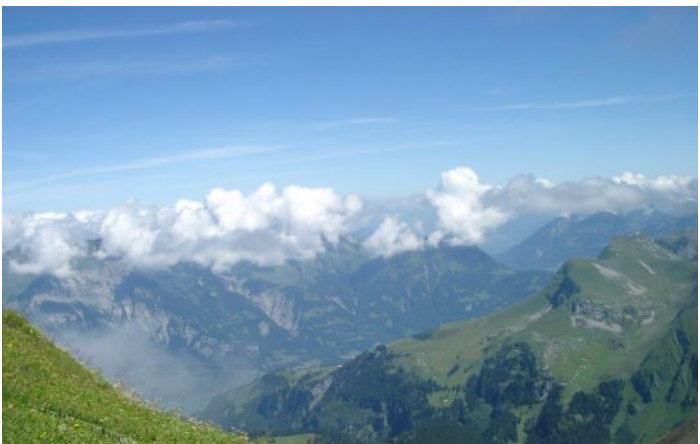
これは、多少の、誇張があるにせよ、その時に、私が受けた印象は、それほど強烈なものでした。

ずっと以前のことですが、叔父が私の好奇心を煽るかのように、グランドキャニオンやナイアガラの滝の強烈な印象について語ってくれたことがありました。

「凄い、凄い、と何度でも人から聞かされていて、実際に自分の眼で見ても、なおかつ、ああ確かにこれは凄い。」と驚嘆できるような感動が、広い世界の中にはあるのだ、ということを教えてくれたのです。

あの時に、一度は味わってみたいとあこがれた、想像を絶する驚愕と感動が、今、眼下に広がっていました。

これは、展望台からは少し下りてしまった後の、写真です。



西日の射す、幻想的なバッハアルプ湖

帰り道は、かなりのスピードで下りて来ました。右膝には多少負担がかかりましたが、心臓には楽でした。途中、例のバッハアルプ湖で休憩しましたが、その時間帯には西日が射しており、実に美しく幻想的な風景でした。

幻想的と感じるのは、緑の丘陵の中にある湖が、方位や仰角によっては背景のアルプスの氷河とちょうど重なるからだと思います。遠景と近景が合体して一つ視野に収まると、野の緑と寒々とした氷河が、違和感のある不思議な美しさを醸し出していました。Zさんの解説によれば、特に、西日の射す時が幻想的ということでした。



シュレックホルンとバッハアルプ湖

暫く、湖畔に座っていると、汗が冷えて来て肌寒く感じられるようになりました。それ
で出発となりました。フィルストからはロープウェイで一気に、グリンデルワルドの町へ
と降り立ちました。

ディナーは、Zさんが懇意にしている、イタリアンレストランで取るうということにな
りました。メニユーは定かには覚えていませんが、私と良子は赤のグラスワインを注文し、
オードブルと野菜スープ。次に、当店自慢のスパゲティが出ました。スパゲティがかな
りの量でしたので、メインディッシュの鶏肉か豚肉であったかのソテーは、とても食べ切
れませんでした。デザートはバナラと木苺の二色アイスクリームでした。それをエスプレ
ッソコーヒーと一緒に、賞味しながら口に運んでいるとき、外がまだかなり明るいことに
気が付きました。時刻はすでに午後6時を回っていました。隣のテーブルで陽気にはしゃ
ぎながら夕食を楽しんでいる、イタリア人グループを見つめながら、今は遠く異国にいる
のだと、ほのかな旅愁を感じました。

天体としての地球

また、日頃は、考えたこともない天体としての地球の運行を考えさせられました。夜が
何時までも暮れずに6時頃まで明るいのには、日没後も北極を越えて地球の裏側に回り込ん
だ光が、そこまで到達するためです。するとそれは、当地の緯度が高く、しかも北半球で

は夏季には地軸が太陽に向かって傾いているため、と推測できます。

しかし、ツエルマツトでのディナーの際、ツアーのメンバーの一人であるXさんが、「夜
明けとともに朝日に染まる、アイガー山頂の輝きが、毎日9分づつ遅くなって行くことが
はっきりと判ります。これは一体何故なのでしょうか。」と疑問を呈された時、私は、深く
考えもせず、「それは当地の緯度が高く、しかも公転軌道に対して地軸が傾いているせい
ではないでしょうか。」と軽薄にも、答えてしまいました。しかし、その夜、ベッドの中で改
めて考えてみますと、全く理屈になっていないことに気付かされて、思わず赤面しました。

あの時、大まかに、考えたことは、地球が一定の角速度Eで自転している時、緯度が高
ければ高いほど、その地点で描かれる円の半径は小さくなり、円周も小さくなります。す
ると、高い緯度では、単位の距離に対して、時間の変化率は大きくなり、(日の出という)
自然現象の時間的変化も、より濃密に知覚されることになるのでは、と思ったのです。

しかし、実際には論理性に乏しい、単なる思いつきに過ぎなかったようです。時計の
翳り方でも比べて見れば、何かヒントになるのかも知れません。

アイガー山頂の黄金の輝き(紀行、第一日目)

実は、私自身も日の出時刻の「アイガー山頂の黄金の輝き」に気付いていました。

第一日目はチューリッヒ空港からバスでグリンデルワルドに入りました。



バスの車窓から

ホテルに到着したのは午後9時をやや過ぎた頃だったと思います。宿泊は「アイガーホテル」という名のホテルで、その名の通りアイガーの荒々しい岩肌が、**main street**を隔てて、直ぐ目の前に屹立しています。玄関を入って直ぐ右奥の、フロントとは反対側に、アイガーの岩壁面の大きな模型が飾ってありました。それを目の前の本物と対比しようとして、方角が気になりました。日頃は、男体山や日光連山を当たり前のように見て、方角な

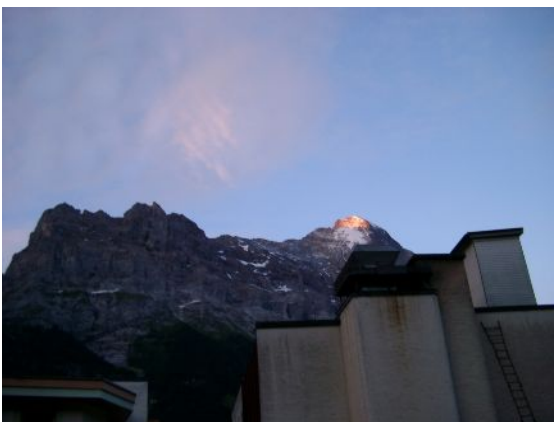
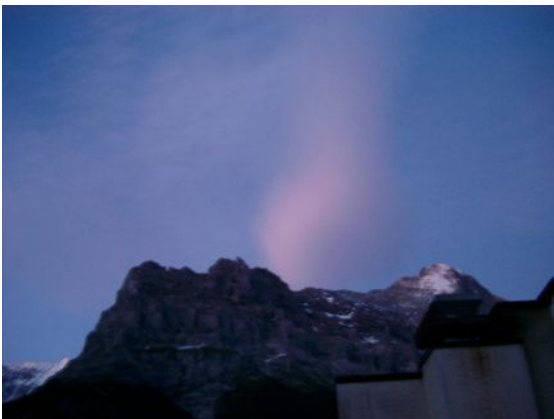
どは考える必要のない生活をしてきた私ですが、はじめてその必要性に気付かされました。但し、模型は、アイガー北壁に違いないと、見当はつけていました。

部屋に入って一息ついた後、ベランダに出てみました。日没後であったと思いますが、周囲はまだ十分な明るさでした。改めて、アイガーの山頂を見上げて方角を考えました。すると、雲の群がゆっくりと右から左へと流れて行くことに気が付きました。突然、**World weather**の番組が頭をよぎりました。美人アナウンサーの背後には、気象衛星からの早送り映像が大写しされていて、ヨーロッパ大陸では雲が渦を巻くようにして西から東へと流れてゆきました。それで、向かって左が東かも知れないと思っただけです。でも確証がありません。バッグの中に今回の旅行のガイドブックが入っていることを思い出しました。早速、取り出して、その中の簡易地図を見ると、予想通りアイガーはグリンデルワルドの下側に位置していました。推論は正しいのかも知れないと、少し興奮気味になって地図の上下を逆にして位置関係を確認しました。すると、地図を逆にしようとしまいと、もはや北極はアイガーに対して自分の背中側であることは明白でした。日本は左手でフランスは右手、アイガーの向こう側はイタリアで、目の前に立ちはだかる巨大な壁こそ、有名なアイガーの北壁なのだと感激しました。

翌朝は、「時間という時差の関係で、朝8時に目が覚めました。まだ、日の出前で周囲は

真っ暗でした。ベッドの中で30分程度、ぐずぐずして、やおら起き出しました。トイレを済ませた後、それでもなお暗い部屋の中をぶらぶらして、ベランダに出ました。すると空気がひんやりと肌寒いくらいでしたが、とても爽やかでした。ふとアイガーの頂をみれば、未だ明けやらぬ青黒い空を背景として、凛々しく屹立していました。

ベランダの椅子に座ってぼんやりと空を眺めていると、昨日の方角判定の正しさを裏付けるかのように、徐々に左側の空が白み始めたのです。すると見る間に、全ての雲の左側がいつせいに茜色に染まりはじめ、空がどんどん明るさを増してきたか、と思えたその時、突如として、アイガーの山頂が黄金色に輝いたのです。北壁とばかり思い込んでいた、山頂の左側面は、東面だったのです。それは、日頃なら目覚めていない時間帯に、偶然遭遇できた、幸運でした。朝焼けに染まり、金色に輝くアイガー東壁は、頭から冷水を浴びせられたような衝撃でした。我に返って、慌ててその光景をカメラに収めようとした時には、神々しいまでの輝きはほんの一瞬で、既に、色褪せてしまっていました。



朝日に輝く、アイガー山頂

方角

今、改めてハイキングの道順を、頭の中で辿ってみますと、あの印象的だったフィルス
ト丘からの眺望では、ユングフラウ山系を南西に見ていたとするなら、バッハアルプ湖へ
はその反対方向、つまり北東に向かっていていると思っていました。しかし、あらためて、
インターネットから取った、イラストの地図をみると、北からむしる北西に向かつて
いたようです。即ち、北西方向に暫く歩いて、左への転回では更に、北西寄りに進むこと
になったようです。その少し先がバッハアルプ湖だったのでしよう。湖畔の道から連続し
て、徐々に急峻になっていった辺りでも、北西寄りに向かって進み、ようやく立ったあの
丘の上からは、ユングフラウ山系を北西から南西もしくは南方向にみていたことになるの
でしようか。最後の、ファールホルンのロッジへの急斜面は、一体どの斜面を登ったのか、
地図を確認しないと判りません。しかし、ファールホルンの展望台からは、アイガー、メ
ンヒ、ユングフラウの順で連なっていましたから、結局は、標高差500mの行程を、終始、
直線的に北西方向に登って、最後には別の尾根から、再び南西方向を眺望したということ
になったのだと思います。

勿論、これは、勝手な当て推量に過ぎませんから、間違っているかも知れません。しか
し、デジカメで撮影した映像を、撮影時間と影の付き方から、方角を、あれこれ推理し、
新たな事実を見出すことは、旅の思い出に、また違った趣を与えてくれる様です。



丘

ファールホルン
2681m

北

ユングフラウヤツホとトップオブヨーロッパ（紀行、第三日目）

紀行、第三日目は有名なユングフラウ鉄道の登山電車で、ユングフラウヤツホのトップオブヨーロッパを目指しました。

昨日とは反対方向に、ホテルの玄関を出てから右手に下って、やはり15分程度でグリンデルワルド駅に着きました。駅前のそれ程、広くはない広場には、木製の花壇に綺麗な花々が、溢れるように活けられていて、その直ぐ近くには、丸太で四角に囲われた柵にユングフラウ周辺の地理と鉄道のルートが掲示されていました。

ガイドさんから切符をもらって、駅員のいない改札口を通過してホームに出ました。ホームは線路と同じ高さで、内側に黄色い線が引いてありました。

クライネシャイデック、ユングフラウヨツホと書いてある側に停車している、電車に乗り込みました。車体は緑で窓枠が黄色とツートンカラーに品良く色分けされた、これぞヨーロッパの電車という感じのする、模型のような電車でした。

一旦、目的方向とは反対に走りました。Zさんの説明では、グリンデルワルドには駐車場が不足しているため、観光客の多くが、車を手前のグルント駅に止めるのだそうです。そのため、グルント駅でそれらの観光客を収容した後に、ユングフラウヨツホに向かうとのことでした。



ユングフラウ鉄道

徐々に標高を上げてゆく車窓からの風景は、緑の丘陵に立つ家々が、何と美しく自然と融和しているのか、と感嘆させられました。全体的に茶系統の中間色で統一されている、三角屋根の家屋に白い壁、飾り窓に限って、赤、青、緑の原色が使われています。人工的な原色といえばこれだけで、日本の風景では、必ず見受けられる、どぎつい色の看板や、のぼり旗などは一切ありません。その代わりに、家々の二階のベランダには、溢れんばかりに、赤や黄色、紫などの花々が飾られています。鮮やかな花の原色と人工の茶系統の色合

いが、背景の丘の緑と実に良く調和がとれているのです。欲求を自制する理性があればこそ、このような洒落た風景が生まれるのだと思います。

車窓の左手にアイガーの北東壁をみながら走っていた電車は、左にカーブして、いよいよアイガーの北壁が見えてきました。光を拒絶して暗く翳る、どす黒くよんだ岩壁は、一切の挑戦をもまた拒絶するかの如く、北の空に向かって寒々と聳え立っていました。

やがて電車は、焦げ茶色をした、中央の屋根が山型になった、瀟洒な駅に入りました。駅名はドイツ語でラウターブルネンと書かれており、括弧してインターラーケンとなっています。

ここで、登山電車に乗り換えました。アプト式の線路の中央には、電車の底にある歯車を受けるための突起が、等間隔に一列に突き出ている、目を引きました。

電車の中でZさんが、高山病の予防のためとあって、小さな飴を1個ずつ配ってくれました。唾液が出ると高山病になりにくいとのことでしたが、私には、理解できない理屈でした。包み紙を見ると、医療関係者には馴染み深い、ノバルティスファーマ社のロゴマークが付いていました。

線路はアイガーの岩盤をくり抜いて敷設されていました。難工事を極めたというその当時の様子が、帰りの車内でビデオ放映されていました。



岩盤掘削の際に生じた大量の破片を、外に投げ捨てたという、アイガー岩壁に開けられた、かなり大きな穴があります。これが、現在ではユングフラウヨッホの一つ手前の駅にある、氷河を見学するための、展望窓として利用されていました。



ユングフラウ駅 標高 3454m

ユングフラウ ヨツホ駅に到着すると、駅名の下に3,454mの標高が表示してありました。これを記念のために、カメラに収めました。改めて、富士山の頂上近くの標高にいるのだと感激しました。

私は約20年程前に、この地を訪れたことがあります。その頃と比較すると、随分、近代的な展望台となっているようです。以前がどのようなようであったかは、記憶が定かではありません。しかし、パンフレットのイラストを見ると、スフィンクス展望台と名付けられた施設を中心として、幾つかの施設が、放射状に、円形のトンネルで結ばれていて、さながら

宇宙ステーションの様でした。

まず、駅のホームから、起点となる、地下のエレベーターホールに行き、一気にスフィンクス展望台の上に出ました。すると、アルプス最大と云われている、アレツジ氷河の雄大な景観が眼に飛び込んできました。

眼の前に広がっている、まばゆいばかりの光景を見て、20年前の記憶が鮮やかに蘇りました。あの時には強く光を感じたのです。一瞬にして閃光が走り、各々、距離の違う全ての物体に、光が同時に到達しているような、そんな印象を受けたのです。湿度が低く、大気が清澄なために、氷河のまばゆさに目がくらんで、そう感じたのでしょうか。ベルンの特許庁に務めていたアインシュタインも、この光景を見たからこそ、光速と時間の関係を考える気になったのではないかと、そんな風に思ったりしたのでした。



アレッジ氷河

展望台の外に出て、アレッジ氷河を少し歩き、撮影しました。次ぎに、エレベーターで地下に降りて、トンネルを通って、氷河の下に造られている氷の宮殿、アイスパレスに行きました。滑るので、足元に注意しながら、手摺りにつかまりながら進みました。中には、多数の氷の彫刻が飾ってありました。鷹か鷲の一種で、極北の氷河に生息して獲物を捕るといふ、猛禽類の彫刻が印象に残りました。



Ryoko in the Ice Palace

スフィンクス展望台のメインホールに戻り、トップオブヨーロッパから日本の我が家へ、メンヒの写っている絵はがきを出しました。子供の頃の、もう、日本では見ることでできなくなってしまった、丸い赤ポストに投函しました。

ユングフラウ ヨッホ駅からアイガーグレッツチャー駅まで電車で下りました。グレッツチャーは氷河という意味です。外に出て、線路脇から続いている斜面を下りると、そこは赤、青、黄色も鮮やかな、花が咲き乱れている野原でした。左右にアイガー渓谷とユングフラウ渓谷の氷河を正視して、ごつごつと荒い岩肌の割れ目の所々からは、氷河の溶けた水が細い滝となって流れ落ちていました。我々の立っている野原との間には、深く、奈落の底の様な渓谷が広がっていました。右手には真っ青な空の下に、緑の丘陵が谷間を縫うようにして広がっていました。まさに、サウンド オブ ミュージックの一シーンを思い起こさせるような景観で、アルプスの陽の部分が凝縮されている風景でした。そこで、昼食を取りました。なんと、おにぎりが入っていました。ご飯が軟らかかったのが、不満でしたが、この景色の中では美味しく感じられました。なにより、風がとても爽やかでした。



アイガーグレッツチャー駅付近の野原

それから、インターラーケンを目指して、本日のハイキングとなりました。最初は、左側が下り斜面となっている細道で、尾根の伝い歩きのようにして坂を下って行きました。右は上がり斜面で左は谷でした。やがて、広い丘陵に出て、緩やかに右カーブすると、どこかに牛達が草を噛んでいる、いつもながらの牧草地帯でした。標識が立っていて、それ

まで歩いて来た後方はアイガーグレッチャ、進行方向はクライネシャイデック、グリーンデルワルドになっていました。



左方向がグリーンデルワルド

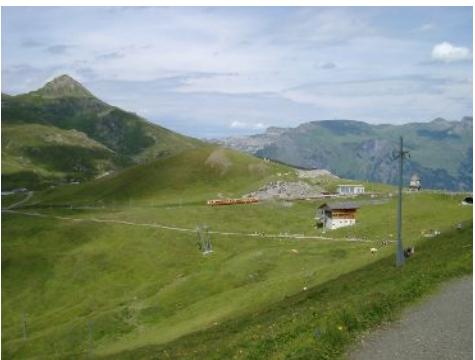
更に降りて行くと、それまでは壁になっていた右側の斜面が、低くなって視界が開け、ロマンチックな丘の風景に変わりました。

爽やかに風のわたる、美しい丘の上、真っ青な空には白くたなびく雲、遠くには氷河を

抱いて光るアルプスの峰々。過ぎ去りし日の記憶が呼び覚まされ、何故か胸痛くなる、そんな郷愁をそそる風景でした。

やがて左下方に、洒落た駅舎と町が見えてきました。その時、丘を登ってくる、登山電車が小さく目に入りました。瞬間的にこれは父の鉄道模型だと思いました。縮尺もちやうど、HOゲージの倍率にみえる、距離でした。

父のレイアウトには、所々に、ヨーロッパ風の瀟洒な駅舎や家々が建っており、その



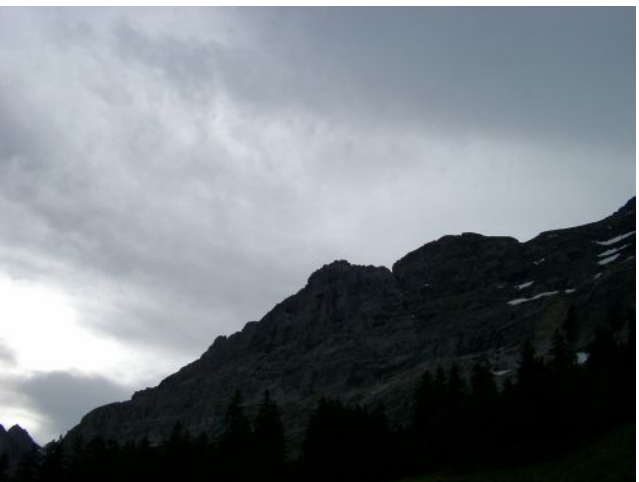
登山電車

周りを色鮮やかな、メルクリン社製の模型機関車が回っていました。今、目の前に広がっている風景こそ、あの時、父が造ろうとしていた、レイアウトの原型なのだと思います。徒歩でインターラーケンの町に入りました。駅でトイレ休憩を済ませた後、再び歩いて数駅下ろうと云うことになりました。緑の牧草地帯の風景から、どのような方向に曲がったのでしょうか。徐々にアイガーの北壁が見えてきました。

この頃から、午後の空はどんよりと曇ってきて、一雨きそうな雲行きとなって来ました。麓から見上げると、アイガー北壁は地面から直接せり上がって、あたかも屏風のように屹立していました。山頂付近にはどす黒い雲がかかり、光は全く届かずに暗く翳っていました。一切の光を絶ち、なん人の挑戦をも拒絶するかのようにはげえ立つその姿は、凛々しく、崇高で「神々の棲む山」という感じがしました。アルプスの、影の部分の極致でした。

駅に近付いたところで雨となり、山小屋で一休みしました。やや廃屋気味となった小屋は、霧雨に煙る雄大な緑の丘には、ぴったりの風情でした。

駅から電車でグリンデルワルドに下りました。我々の電車は臨時電車とのことで、車内は観光客で満員でした。電車は一旦、グルント駅まで下りて、戻りました。



アイガーの南壁？

注：アイガーの北壁は、撮影できていません。

ウィリアムテルと少年

グリンデルワルド駅に到着し、駅前の交差点をホテルに向かって斜めに渡りました。渡りきった、対側すぐのところには物産店があり、何気なく入ってみました。すると、レジの奥のショーケースに、幾つかの人形が飾ってありました。これが出発前に北島教授に頼まれていた、スイス特産の木彫りの人形だと直感しました。男の子が牛の乳搾りをしている人形が気に入ったので、注文しました。すると、木の椅子に腰掛けてパイプをくゆらせている、お爺さんの人形や、アルプスフォールンを吹奏している、楽師の人形も欲しくなりました。これらも一緒に注文しますと、レジにいた中年の婦人がいぶかしげに、疑うような目つきで私を見つめました。

彼女が人形を逆さまにして、底面の値段を確認している時、いやな予感が走りました。これは高いのかも知れないと、不安になりました。案の定、男の子と牛だけで約200スイスフランでした。スイスフランのレートには馴染んでいませんでしたが、改めて、ほぼ100倍であることに気が付きました。少し調子にのりすぎたかと、内心後悔しました。しかし、私はクレジットカードを使うつもりでしたから、まだ、余裕がありました。

つたない英語で「JCBカードは使えるか。」と質問しました。すると、彼女は「ノー、VISAカードならオーケー。」と答えました。私は少々慌て気味に、財布からVISAカードを取り出すと、なんと期限が切れていました。さすがに動揺して、良子に応援を求めましたが、

運悪く彼女もカードは持ち合わせていませんでした。それで、私は、ホテルに戻らないとカードがない旨を告げて、「急いでホテルに戻ってから引き返して来る。」と言いました。内容は通じたようでしたが、信用が皆無でした。既に、午後9時を回った頃で、彼女の帰る時間も近かったのでしょうか。人騒がせな東洋の客に対して、彼女は多少ぞんざいな態度になり、包みかけた乳搾りの男の子と牛を、またショーケースに戻しました。

グリンデルワルドは小さな町で、ホテルと店との距離は、往復30分くらいでした。ホテルに戻って、この失態に、恥ずかしさが込み上げてきました。時刻も既に9時近くになってしまっており、出かけることが躊躇されました。グリンデルワルドはその日が最後でした。私は、なかば諦めかけました。すると、良子が「日本人は約束を守らないと、言われるのは嫌だから、行きましょう。」とキッパリとした口調で言いました。

決心がつけば、15分弱の距離です。店は開いていました。レジにはまだ、あの婦人が座っていました。先ほどの注文に加えて、アコーディオンの楽師と品の良い顔をした、りんごを手を持った少年を追加しました。この時、何故、りんごを持っているのか、不自然な感じで気になりました。質問すると、彼女は振り返って、奥に向かって声を掛けました。すると、50〜60才の男性が出てきました。趣旨は通じていたようです。男性は機嫌が良いように見えました。それで、スイスの歴史を何も知らない東洋の客のために、得意満面に

説明し始めました。それまでは気が付きませんでした。少年の直ぐ隣には、洋弓を構えた、もう一体の人形があったのです。これで、合点がゆきました。それはウィリアムテルと少年の人形だったのです。要するに、彼は、二体一緒でなければ売らない、ということを一生命に説明していたのでした。私は、両方とも買ってしまいたい、という衝動にかけられました。しかし、レジの数字は、すでに結構な額に達してしまいました。表示は、小数点二桁のデジタル数字でしたから、小数点を取って読めば、それがそのまま日本円でした。既に、三十万を越えていました。カードは良子のもという遠慮もあって、結局、断念しました。男性は、お国自慢ができたことで、上機嫌に、鼻歌でも口ずさむかのように、少年を再びウィリアムテルの前に立たせました。一方、私は、人形は心残りでしたが、日本人としての信義を示せたことで、やはり満ち足りた気分でした。

その後、ツエルマットにも木彫り人形はありましたが、こちらの方が明らかに上質でした。比べてみると一目瞭然なのですが、言葉では、曰く言い難いです。敢えて言えば、アルプスの感性が良く表現されている、ということ。上品な素材さの中に秘められた、匠の技、そんな感じのする木彫り人形なのです。

支払いの際には、レジのふたりは好意的で、空港での免税手続きを、丁寧に説明してくれました。彼らの発行してくれた販売証明書に、必要事項を記入して、サインして提出すれば、何割か免税になる、とのことでした。



グリンデルワルトの木彫り人形

ツエルマツト(紀行、第五日目)

註) ツエルマツトでは、ガソリン車の乗り入れは全面禁止されています。それで、一つ手前の駅でバスを降り、電車でツエルマツトに入りました。途中、線路脇の空き地には、マイカーが多数、青空駐車していました。駅とホテルの往復には、電気自動車が使われていました。但し、公の作業車に限って、ガソリン車が許可されており、早朝、外気に触れようと思つて、ホテルの外に出てみると、その時、回つて来た清掃車はガソリン車でした。



電気自動車

ツエルマツトで迎えた紀行、第四日目は早朝こそ雨がパラつきましたが、ツエルマツト駅から登山電車に乗る頃には、すでに上がつてしまいました。快晴とまでは行かなくとも、

今日もまた、天候は上々のようです。

昔、我が家にあつた、メルクリン社製の模型そのままのような登山電車で、標高、約3,430mのゴルナーグラット駅まで一気に登りました。途中、一番のお目当てであるマッターホルンには、山頂から中腹まで厚く雲がかかつており、山の一面全部が削ぎ落とされて、四角錐の頂上の、鉄の爪がややお辞儀をした感じの、あの独特の勇姿は、車窓からはついに見ることができませんでした。幾たびか、かなり線路が山の間に迫る箇所もありましたので、少し残念でした。ただ、一際、目を引く大きな奇岩が、マッターホルンの門番という感じで、鎮座していました。巨大な芋虫が少し“く”の字に胴体をくねらせているような形をしており、花崗岩だと思えます。登山電車の進行方向に沿って、マッターホルンを車窓から、視野全体に捕らえられるようになる角度では、この奇岩は必ず堂々と横たわっているのです。

厚く覆っていた雲が流れて、雲間に山頂が顔を覗かせた瞬間もありました。



マッターホルンと芋虫岩

そして、ここでもまたヨーロッパアルプスの眺望には、度肝を抜かれました。遥かに氷河を抱いて輝く、4,000mを超える峰々の延々たる連なりや、眼下にせり出して来る岩盤や氷河、アルプス造山活動の往時の激しさを偲ばせる、隆起した地殻の荒々しさ、ぶ厚い地

層をそのままに露出させて、谷底深く落ちこんで行く断崖、などには驚嘆せずにはおれませんでした。

そして、ゴルナーグラットの展望台から300。全方位で、この山系の全貌を見渡した後、展望台を出て、我々は山岳ガイドZさんの先導で本日のコースを歩き始めました。



ゴルナーグラット展望台

まず、モンテローザから下りて来て、眼下に広がっているゴルナー氷河に向かって脇道にそれてゆきました。



モンテローザ

最初からかなりの急勾配を下り始めました。右膝には少々負担でしたが、意地になって先頭グループを保持しました。途中、岩陰に見え隠れしているカモシカの親子に出会いました。頭部の両側に、横縞の模様が入っていて、ホルン状の反り返った角を持ち、胴体が岩肌に似た灰色のカモシカです。アルプスのガイドブックの表表紙に、岩山を背にして立って、赤や黄色の高山植物と一緒に写っている、例のカモシカです。険しい岩盤を自在に

飛び跳ねて往来ができるのでしょうか。我々に気づいても、別段、逃げようともせず、悠然としており、余裕しやくしやくに見えました。

急坂を降りるとそこは、緑がやや盛りを過ぎてしまったお花畑でした。左手にはモンテローザ、右手にはマッターホルンを間近に見上げることができる野原で、日当たりの良い静謐な空間でした。その窪地を目的であるマッターホルンの方角とは反対に、モンテローザの方向に歩きました。モンテローザを正面視することができる、崖の淵まで行って、野原の上に腰を下ろして一休みしました。下から巻くようにして吹き上げてくる風は肌寒いくらいでしたが、崖淵には野生のエーデルワイスの花が咲いていました。Zさんはこれを見せたかったのだ、と思いました。

花びらは真っ白で、円錐形に丸まっており、外に向かってとんがっています。大小不揃いのこの花びらが、七つ、八つ、星状に配列しており、中心には、お供えのダンゴのように、黄色くて、小さな花芯が、数個、折り重なっていました。この独特の形状は高い標高の、強風に適応したのでしょうか。今までには見たことのない、小さくて可憐な花でした。

今来た道を戻る方向でマッターホルンを左手に見ながら、リッフェル駅に向かって歩きました。すると、やがて例の奇岩が全容を現しました。この頃になると、厚く覆っていた雲海は少し流れて、そのぶ厚い雲の合間から、マッターホルンの山頂が、顔を覗かせるよ

うになっていました。門番の奇岩を山のふもと方向に回り込むと、40〜50m先でしょうか。下方に群青色の水をたたえた、清楚な湖が目に入りました。ドイツ語ではリッツフェルゼーでゼーは「湖」ということですが、湖とは名ばかりの実際には沼ほどの大きさです。時間はちやうど正午ころであったと思います。湖畔にはハイカー達が大勢集まっていました。私達も湖畔に下りて、時計方向に一周ほど回りました。すると、小さな木造の教会が建っていました。おそらく、登山の安全を祈願するための教会なのでしょう、中央の祭壇には質素な木製のマリア像が安置されていました。私は黙礼して、そつと旅の安全を祈りました。

リッフェル駅から登山電車で数駅、一駅だったかも知れませんが、下ってその駅で下車しました。トイレ休憩を済ませて、線路を渡ってからすぐの杉林、良子はヒマラヤ杉と云っていました、に入って、各々、日当たりの良い場所を選んで、木かぶなどに腰をおろして昼食となりました。すると、ヒマラヤ杉の合間から、マッターホルンが覗くように見えました。中腹には依然として、厚い雲が掛かっていましたが、マッターホルンの頂の氷河と、常緑樹の杉の緑が、今までには見たことのない対比で、不可思議な美しさでした。時折、強い風が吹いてきて、紙くずなどが飛ばされないように気を遣いました。

少し進むと、比較的平坦な斜面があり、ヒマラヤ杉の林となっていました。午後のこの時間帯は、日当たりが悪い場所なのでしょう。歩道を外れると、地面ははじめ湿って



門番の奇岩

ヒマラヤ杉とマッターホルン

いました。私は、ガイドのZさんに、

「イタリアの方角はどちらですか。」と質問しました。

すると、彼は行く手のやや右方向を指さしたような気がしました。

そして、「熊谷さんはイタリアに興味があるのですか。」と聞き返してきました。私は、「ええ、まあ。」と曖昧な返事をしました。

ナポレオンのアルプス越えに先立つこと、2,000年以上も昔に、象を率いてアルプスを越えた偉大な将軍がいたのです。カルタゴの生んだ不世出の名将、ハンニバルです。彼はこの難事業を成し遂げて、古代ローマ共和国と決戦するために、イタリア本土へと侵攻して行ったのです。実は、このハンニバルのアルプス越えのルートが、今でもヨーロッパの人達にとっては論争の種であり、どんな取るに足らない些細な事でも、必ず口角泡を飛ばす議論に発展してしまう、と書かれていました。つい、そんなことを思い出していたのです。

我々は南東か東の方に歩いているのでしょうか。やがて、遠く下方にはツエルマットの町並みが見えて来ました。特に、町のシンボルである教会の、茄子のへたを細長く引き延ばしたような、緑の銅板葺きの屋根が目を引きました。へたのてっぺんには金色の十字架が輝いていました。

町に近づくくと、氷河が溶けた水が濁流となって、勢いよくツエルマットの町に流れ込んで行きます。この川岸の歩道に沿って歩きました。やや下ってから、左に折れて石造りの橋を渡り、教会の前で解散となりました。



ツエルマットの教会

シャモニー(Chamonix) キンブレン(Mont-Blanc) (紀行第六日目)

シャモニーモンブランでのことは、二年前の記憶を辿っての不確かな記述です。

シャモニーへの移動は、ツェルマツト(Zermatt)駅から電車で一駅下って、バスに乗り換えたはず。確か、電車を待つ迄の間に、駅前のドラッグストアで、旅の記念として、美しいアルプスの田園地帯が写っている、風景写真を買いました。

バスは峠の道を登って行き、住民が、国境を自由に行き来して、ガソリンは、その折々、レートの有利な方で給油するという、国境近くの町を通り過ぎて、フランスに入りました。それから、高速道路を南北は不明ですが、東西は西方向に走ったはず。途中、分岐の標識が多数出てきましたが、(懐かしいシオンへの標識も、思い出に耽る間もなく、飛ぶようにして、車窓から後方へ遠ざかって行きました。)それらには、見向きもせず、バスは一路、シャモニーを目指してひた走りました。

展望台へのロープウェイ乗車駅の待合いに、雄大な氷河の写真が、大きく、掲げられていました。Zさんから、その説明があったようですが、私は、モンブランを探していて、頭には入りませんでした。

中継点で、五、六十人乗りだったと思います、大型のゴンドラに乗り換えましたが、イスに比べて旧式でした。床の中央には木製のボックスが置かれており、つつきり、非常用具が入っているのだろうと思っていました。実は、これは重し、だったのです。その必

要性は直ぐに体験できました。

ゴンドラが終着点に近づくと、斜面が急速にきつくなつて、直ぐ眼前に、岩肌がせり上がるようにして、迫って来ます。しかもこの地点は、常時、風が吹いているようですから、迫力満点です。ゴンドラが強風に煽られて、今にも岩壁に激突するのでは、と思われた瞬間、プラットホームに到着していました。

天候は薄曇りでした。改札出口から続いている、トンネルを抜けて、外に出ると、展望台への鉄製の階段は、ツルツルに凍っていました。おまけに強風が吹きつけており、登る際には下から煽られて、危険を感じる程でした。展望台に出ると、風は更に強くなり、風速、30m 前後とのことでした。気温は氷点下で、網目になっている鉄製の床は、ところどころ氷が張っていて、手摺りを離すと、強風に押されて、あわや滑りそうになります。フードで顔を隠して、しっかりと両足を踏ん張って、記念写真を撮りました。まるで北極点にでも立ったかのような写真になりました。



名称不明の展望台（この時には、薄日が射したようです）

展望台の直ぐ下には、喫茶室があり、この頃には、強風にやや辟易でしたから、メンバー一同、休憩となりました。その時、メンバーの名簿を作ろう、ということになり、エンジニアの KO さんが担当となりました。私達も、ドリンクを待つ間に、順送りされてきた用紙に、住所と電話番号、e-mail address を書き込みました。

記憶が不確かです。昼食をとった、レストランの写真があります。プロパティで撮影時間をみると、2004/08/19 20:05:28 となっています。すなわち、時差の「7」を引くと13時5分です。その前の、北極点征服の写真が、2004/08/19 17:16:24 で、現地時間では、10時16分です。即ち、三時間近く経過しています。おそらく、再び、ゴンドラでロープウェイの中継点迄、下りて、少し歩いてこのレストランへ行きました。予め、料理を、メニューに付された番号で注文しておいて、カウンターにならんで、お盆に載せてもらってから、レジで会計する、という方式でした。メインディッシュは何であったか、豆スープとブラックチェリーのトルテを食べた記憶があります。スイスのトルテは、それは美味しいと、叔父から聞かされていたからです。



レストラン

それから、シャモニーの町に降りて、ホテルにチェックインしました。

今、自室の机を探してみると、雑然と積み上げられた、書類の束の中に、そのホテルの Welcome card が、捨てられずにとってありました。Hotel Alpina と書いてありました。午後から、良子とふたりでシャモニーの町に出て、旅の最後の名残を惜しましました。

明日、私達と一緒に帰るのは、Wさんだけでした。

午後 7:00 頃、ホテルの最上階のレストラン、パノラマ(註) Card に Restaurant Panoramique Le 4810 と書いてあります。)で、いつも通り、メンバーの皆さん達と一緒に、ディナーになりました。私達と Wさんにとっては最後のディナーでした。我々の間には、お互い励まし合ったもの同士、ごく自然な形で、仄かな連帯感が芽生えていました。最年長の KAさんが、

「明日は晴れて、最後にモンブランが見えるといいですね。」と声を掛けて下さいました。皆さんの、さりげないご好意が胸に滲みました。食後に、メンバー一同で記念写真を撮りました。部屋にもどって、荷物をトランクに詰めて、ドアの外に出しました。

記憶のミッシングリング

ひとつの、失われてしまった、記憶の輪があります。8月19日に昼食をとった、山のレストランの写真があり、撮影時間をみると、2004/08/19 20:05:28 となっています。その次

には、厚い雲海に、山の頂が覆われてしまっている写真があり、これはおそらく、モンブランを写そうとしたものです。撮影時間は、2004/08/19 20:37:30 ですから、二枚の写真の時間差は 32 分 02 秒です。不可解なのが、その次の、ロープウェイの発着地点から撮ったと思われる、山の麓の風景写真で、日付が、2004/08/20 22:09:37 となっていることです。前のモンブランの写真とは、26 時間、即ち、丸一日と二時間の差があるのです。

ちなみに、旅行最後の写真は、帰国の日の早朝、ホテルのベランダから撮った写真です。時間は、2004/08/21 13:34:34 で現地時間では、八月二十日の早朝 06 時 34 分 34 秒です。

私は、あの、レストランの日が、最終日であったと記憶しているのですが、空白の一日、八月二十日があるようです。しかも、その日に、一体、何をしたのか、さっぱり記憶がないのです。ただ、メモリーがつきて、写真を撮らなかつた日があつたような記憶がありません。

いずれにせよ、KAさんの言葉は、スイスを離れる前日の、最後の晚餐でのことです。現地時間では二十日の夜、八時頃でしょうか。もし、写真を写していれば、2004/08/21 03:00:00 と刻印されていたであろう、時のことです。



早朝のミヤガリー (2004/08/21 13:34:34)



山頂を覆う、雲海 (2004/08/19 20:37:30)



不明の山麓 (2004/08/20 22:09:37)

帰国、(紀行、第八日目)

翌日は曇りで、朝食時に、パノラマのウィンドウからは、ついに、白い魔の山、モンブランを見ることはできませんでした。

前日、Zさんから、空港へは、彼の知人の息子さんが、送ってくれる手筈になっていると、告げられていました。

その言葉どおり、〇〇時に、ワゴン車でホテルの玄関に迎えに来てくれました。彼の年令は30才前後で、もうひとり、20才代のフランス人の青年が一緒に、運転を担当してくれました。Mさんと私達と、4人でジュネーブ空港に向かいました。この前の高速道路を、来た時とは反対方向にひた走りました。車中、彼は、北海道の出身で、日本の大学を卒業した後、フランスで山岳ガイドの資格を取るために勉強している、と自己紹介してくれました。

何処で、国境を越えたのでしょうか。いつの間にか、車は、歴史を感じさせる、重厚な街並みのジュネーブ市街に入り、レマン湖の湖畔を走りました。ある大きな交差点で、彼は、

「こちら方向に行くとIHO本部、こちらは以前、国際連盟があった通りです。」と説明してくれました。それから間もなく、車は空港に到着しました。

いよいよ、東京に向かって離陸です。私は、地球温暖化の荒波に、損なわれることなく、

この美しい夢のような風景が、いつまでも永続してくれることを、願わずにはおられませんでした。



Mont-Blanc (白雪魔山)



ツェルマットで購入した風景写真、二葉

スイス国民の国防意識

トレッキング中にすれ違くと、笑顔で挨拶を返してくれる、温和で優しく、礼儀正しい、スイスの人達の、表側の素顔に出会えます。しかし、かれらには裏側の、もうひとつ別の顔があります。

紀行、第四日目、バスでエッシェン湖ツアーに向かった時のことです。州境を越える時に、今まで経験したことのない場面に遭遇しました。鉄道が走っていて、てっきり、次は踏切を越えるのだらうと思っていると、妙なコンクリート製のスロープが出てきました。その上は小さいテーブル状になっており、バックなら内輪差ぎりぎりです。

になっていました。それは、バスを無蓋貨車に誘導するための、スロープでした。そして、このスロープには、もうひとつ別の重要な目的があったのです。なんと、戦車を無蓋貨車に乗せるためのものだったのです。

鉄道という、公共のインフラを民需と軍事で共有させて、一朝、有事の際には、戦車を貨車に乗せて、すばやく、アルプスの尾根や渓谷を越えさせて、敵の予測を上回って、機甲師団を变幻自在に配置しようという、スイス国防軍の戦略的意図による副産物だったのです。

それにしても、前後に細長いバスを、殆ど、広さに余裕のない無蓋貨車に、紙一重で乗せた、バスの運転手の研ぎすまされた、車両感覚と、神業的ハンドルさばきには、一同、感服しきりでした。無事に、作業を完了した時には、車内には称賛の拍手が巻き起こりました。

また、ロープウェイで登っている時に、Wさんがガイドさんから聞いた話として、スイスでは、民家のガレージや洞穴の中に、戦車を隠していて、何時でも出撃できる体制をとっているのだそうです。各家庭には、武器も隠してあるそうです。

私は、この話を聞いた時、この山国の小国が、独仏という二大国の狭間で、独立を保つために、表向きは、永世中立国を掲げて、その裏では、国防に知恵を絞り、常に臨戦態

勢を敷いているという、スイス国民のしたたかな国民性を垣間見た感じがしました。

最後は、マッターホルンの麓を下りて行く際に、Zさんが、話してくれたことです。スイスの人達が、酒の席で好んで話す冗談が、マッターホルンの頂上が、これほど垂直なのは、スイス空軍が、戦闘機の急上昇の訓練をする為に、国民に内緒で、壁を削り落としたからだ、という小話だそうです。素直に解釈すれば、それほどまで人工的な作為に見える、マッターホルンの、自然の造形の不思議さを、自慢に思っている、ということでしょう。しかし、裏を返せば、スイス国民の、ひとたび国防のことになると熱くなる、その国民性を茶化そうという、寓意が込められている感じもします。



マッターホルン北東壁

internet 4.0

